

風地蔵新聞

母の日のプレゼント

大橋美紀

5月18日 一週
間遅れの母の日とい
う事で、昨年は江南
の藤を見に。今年
どこへ母を連れて行
こうかと、色々ネッ
トで調べながら行き
先を迷っていました。
そんな時、テレビで
お城が放送されてい
ました。国宝である
松本城・犬山城・彦
根城・姫路城。大の
城好きロンドンブー
ツの淳が一番好きな
犬山城の観光大使を
やっっているそうで、
城下町も昔の面影を
残す町屋や犬山名物
の串グルメ、そして
こだわりの雑貨店な

どがあるらしくすぐ
にネットで詳しく調
べ、体験もできるの
で決定。
プランを考え、当日
大垣駅に10時に母
と待ち合わせしまし
た。昨年同様今年も
電車の旅です。岐阜
駅まで、JRで行き、
そこから名鉄に乗り
換え、犬山駅に到着。
駅の観光案内所によ
り、イベント案内と、
マップを貰い城下町
へと歩きました。1
0分ほどで城下町の
入口です。日曜日
人も多く賑わってい
ました。ちょうど1
1時を回りお腹もす
いていましたので、
やっぱり串物です。
全部で42種類写真
つきで載っています。

どれも食べたいので
すが、それは無理で
す。まず五平餅。そ
して城下町を歩き、
雑貨店で楽しみまた
歩き、次は炭火焼き
ソーセイジ。これが
一番おいしかった。
母もこのソーセイジ
には大満足。パリッ
とかじると、炭の香
りと肉汁。
最高のソーセイジで
した。必ず串物の店
先には長椅子もあり、
お茶もセルフサービ
スで飲めます。その
他、でんがく、醤油、
お焦げ串。この串が
グランプリだそうで、
人が並んでいました。
おなかも膨れ、いよ
いよ犬山城へと向か
い、お城の入り口前
では、写真撮ります

いきました。その方に
シャッターをお願い
して、犬山城をバツ
クに撮ってもらいま
した。室町時代の1
537年に小田信長
の叔父の信康が築城
し、天守は現存する
日本最古の様式だそ
うです。4階建てで
階段はとても急で2
階には資料が展示さ
れています。ゆっく
りとお城を楽しみま
した。その日はとつ
ても暑かったもので、
お城の中が風が通り
とつても涼しく快適
だったのがとっても
印象的でした。(笑)
その後は木曾三川を
下る犬山城遊覧船に
乗りました。約40
分の間、目の前に迫
る奇岩や怪岩 船上

から犬山城や景色を、
お笑い芸人さんの面
白いガイドと共に、
あつという間の時間
でした。帰りも城下
町を通り、少々小腹
もすいて来たので、
又串グルメを楽しみ、
最後はフルーツやの
イチゴソフトクリー
ムでフィニッシュで
す。時間を忘れて楽
しんでいたら、もう
16時半を過ぎてい
ました。そんなに遠
出した訳ではありま
せんが、1日とても
満喫しました。多く
の人とふれあい、い
つもと違う景色を見
て、歴史を感じ、美
味しいグルメを思う
存分味わいました。
よく歩きましたので、
少々疲れましたが、
日頃同じ毎日からリ
フレッシュしたよう
な思いです。母もと
ても喜んでくれました。

第128号
発行 編集
風地蔵
白石 美帆
〒503-0922
岐阜県大垣市
馬場町85
ヤフーブログ
毎日更新中
炎の女みほ日記
<http://blogs.yahoo.co.jp/rion5230>

時代小説

木造一軒家の古民
家茶屋『地蔵庵』お
んな主が、魑魅魍魎
なる奇妙奇天烈な体
験をしたと訊いた。
時刻は誰そ彼時。つ
まり魔物に遭遇しそ
うな正に逢魔が時。
その日は、たまさか
店には主一人だけで
あった。最後のお客
さんも帰り、空いた
コーヒーカップを店
内に流れるジャズを
聴き乍ら片付けてい
た。ふと玄関に何か
の気配を感じ、覗い
て見るが誰もいない。

と、この時は独り語
地したが、長年の店
の空気で確かに誰か
が上がり框に足を踏
み入れる気配があつ
た。「気になる！」
ふわりとした空間に、
誰？ と声を出した
つもりだったが、声
にならない不気味さ
を感じつつも、薄暗
い廊下の先に目を凝
らすと、小さな後ろ
姿が目に入った。
「座敷わらし？ 心
の動揺でそう見えて
しまうのか・・・い
や、それにしても姿
が異様だ！」おそる
おそる怖いもの見た
さで、よく見える場
所に移動する。そし
てその姿を矯めつ
めつ眺めた。竹の編
み笠を深く被るその
頭がやけに大きい。
着物を着ているが、

両手でお盆を持ち、
その上に紅葉を張り
付けた豆腐が載って
いる・・・「思い出
した！ 店に並べて
ある本の中に、江戸
期に描かれた妖怪ば
かりを集めた『妖怪
事典』で見た記憶が
ある・・・豆腐小僧！
まさか妖怪は湧く
と訊くが・・・」そ
の姿が長い廊下を渡
り終えると、庭にひよつ
こりと降りた。もし
て庭に置いてある、
地蔵さん三体にお盆
に載せていた豆腐を
分け与え、何か話を
し始めていた。しか
し声が小さくて
よく聴き取れない。
その後、地蔵さん達
を連れ、垣根を越え
てフワリとその姿は
消えてしまった。夢
か現か・・・まだ二

律背反の思考回路が
定まらない。その時、
柱の八角時計がポー
ンボンと、まるで
冥界から引き戻して
くれたかの様に、時
の響きに廻りの空気
が変わった。漠とし
た不安がまだ少し残つ
ているが、廊下を何
気なく見ると、少し
土の付いた草鞋跡が
微かに見てとれる
「やっぱり夢ではな
い！？」そして庭
に目をやると、地蔵
さん達は普段と変わ
らずいつもの場所に
ある。「どういう事？
『徒然草』の何段
だったかは忘れたが
“我等が心に念念の
ほしきままに來たり
浮かぶも、心といふ
もののなきにやあら
ん”とあったが、空
だから万物を受け入

れてしまうのか。そ
れとも邯鄲の夢であつ
たのだろうか・・・
こんな話を訊き終え
てから店にある『妖
怪事典・豆腐小僧』
の項を読んでみると
「『豆腐小僧は化も
のの小間使ひ」と川
柳に詠まれ、特に能
力は無く、豆腐を届
けに行く小間使ひの
妖怪。人には危害を
与えず、むしろ気弱
で滑稽な妖怪。また、
お盆に載っている豆
腐は、買うよう（紅
葉）に勧める江戸時
代のダジャレである」
と記してあった。
この物語はフィクショ
ンであり、人物や場
所は特定するもので
はない。

あまでうす



お茶屋敷跡 “ボタン園”に行く

原 由里子

4月18日(金)、

晴天なり。

この日は仕事が見みで、そろそろ見頃の牡丹を見に行こうと、前々から計画していました。特に一緒に行く人もなく、いつものように一人で行くかと思つていました。

すると、姉からメールが届きました。

「由里子休み？暇なんだけどー。」という何ともシンプルなわかりやすい内容でした。姉に電話をかけて、牡丹を見に行くけど、と伝えると、本当に暇だったんだと思います。「お姉も行くー！」と心の叫びの様な答えが返ってきました。

姉の家に行ったが近いので、待ち合わせは姉の家です。

お昼過ぎに着き、出発しました。目的地は、大垣市赤坂に

ある徳川家康の命令で作らせた休泊する為の専用旅舎「お茶屋敷」の跡地です。

そこには、東海屈指の牡丹園があり、90種800株の牡丹が4月下旬から5月上旬にかけて咲き競います。

紅・白・黄そして黒もあるそうですが、鮮やかな色をまとい、その姿を見たくて昨年見に行きました。今年も自転車で乗って向かいます。

昨年も行つたのに、少しだけ迷いました。旧中山道より少し南に入った所にあり、看板も出ていないので。

姉は初めて来たみたいで、お茶屋敷跡の門両脇の竹の小枝で作られた生け垣を見て、「京都みたい」と感激していました。

ちなみにその竹垣を“茶筌垣”と大垣咲楽にかいてありますが、誰



か読み方を教えて下さい。

茅葺の門をくぐり、まず迎えてくれるのが、目にも眩しい春の緑をまとった竹林です。

太陽の光でより一層美しさが倍増しながら、右奥に色鮮やかな牡丹が見えてきます。

牡丹にも早咲き遅咲きがあり、満開の牡丹もあれば、これから咲く牡丹、もう終わったのもありました。牡丹の花によって、甘い香りを楽しめるものもあります。牡丹以外にもチュウリップや水仙の花もきれいに咲いています。ミツバチが花粉まみれになりながら、蜜で足が丸

くなっているのも見かけました。写真も撮っていると姉が横から、「ほら、この牡丹花粉がいっぱいついていて生き生きしてるよ。こういうのを撮らないと。」と、ちゃちゃを入れ

2人でぶらぶら牡丹を見ていると、どうも一人で見に来た年配の男性が話し掛けて来ました。姉はどこに行っても、知らない人に男女問わず話しかけられます。

私は長くなりそうだったので、お話は姉に任せて写真を撮っていました。遠目から様子をみると、いつ終わるんだろうというくらい話好きな男性でした。“逃げてよかった”

少し天気も曇ってきたので、お腹が空きたので、お茶屋敷跡を後にしました。今年も美しい牡丹を見

て、季節を味わえてよかったです。

姉と話していた男性が、「2人の美しさに牡丹もかなわいな。」と言っていました。姉も私も大きなマスクをして、メガネをかけていました。それわかるのかい！と思わずツツコミを入れていました。

おわり



六月号

風に立つライオン

「ひとが死んだ時」にしか泣かないと決めている。

東京に向かう新幹線の中、図書館で借りてきた本を開く。いままで迷いなく突っ走ってきたが、ここに来て、迷ったり、悩んだり、足踏みしていた。

さだまさしの「風に立つライオン」の紹介の文章。「生きていく決意」が感じられ、身体中の力が抜けた。

隣の席のおばちゃんにも、多分気づかれただろう。富士山を眺めながら、肩を震わせて泣いた。たまには、泣くことも、いいものだ。

庭師 奥田良樹